「物語」をキーワードに

すぐれて現代的な問題に取り組んだ一書

山田俊治

内藤千珠子 著

▶**帝国と暗殺**

ジェンダーからみる近代日本のメディア編成

10・28刊 四六判412頁 本体3800円

新曜社

歴史という物語の内部で、メディアが依拠した物語とその間隙が読み取られる

新聞などの報道が、事実を伝えて誰にとっても真実であるということに疑問をもったことはないだろうか。メディアが介在することで、出来事は決して透明には伝わらない。いや、メディアは出来事を作り出すことも可能なのだった。昨年の総選挙で起きた出来事にジャーナリズムの影響が言われているが、的確な情報が提供されていなかったことが原因などではなかった。そもそもジャーナリズム自体に、あの出来事を起こす働きがあったということを、本書は教えてくれるだろう。その意味で、冒頭で「東電OL事件」に触れられているように、すぐれて現代的な問題に取り組んだ一書といえる。

キーワードは、「物語」である。本書では言説が無意識に依拠する枠組みを「物語」と呼び、そうした枠組みが定型化する過程で起きる力学が探られている。主に日清戦争前後から明治天皇の死までを対象として、歴史という物語の内部で、メディアが依拠した物語とその間隙が読み取られる。第一部は、メディアの語る物語が作り出す他者を明らかにして、「われわれ」を生成するジャーナリズムの基本的な働きが解明される。

まず「病と血」では、病の言説に現れた物語定型が扱われ、伝染病が衛生対策の欠如した未開野蛮国を襲うという記述が、文明の側に身を置く「われわれ」を作り出し、植民地主義的認識を正当化していたとする。さらに、血の比喩によって病は生まれつきの属性とされるが、日清戦争が露わにしたのは、兵士たちを通した「日本人」の血の脆弱さであり、病の物語定型を破綻させる徴候が読み取られる。

次の「女たち」が明らかにするのは、他者化された女性である。性的要素を消去されて「母」を代行表象する皇后と、性的に逸脱した女性を代行表象する娼婦を対置し、皇后を理想像とする家族国家観の範型が示される。また、広告メディアから女性が「血の道」を病んだ身体と表象されるのに対して、天皇が体現する男性の壮健な身体が想定され、国民＝男性が病むことへの不安が表象されているとする。

「植民地」は、北海道をめぐる新聞報道から、衰運にある「アイヌ」という他者の物語が検討される。そこには「血の道」を病む女性と同様に、伝染病に罹りやすい「アイヌ」という、女性ジェンダー化した理解があり、「われわれ」は同情によって保護の必要性を語るが、しかし混血の物語は「われわれ」と「かれら」の境界を溶解させてしまう。

第二部は、朝鮮と日本をめぐる歴史をメディアがどのように物語ったかが検証される。「王妃と朝鮮」は、傾城傾国の女性として語られる閔妃に、朝鮮の滅亡を願うメディアの欲望が見出される。しかし、悪徳の報いとして閔妃暗殺事件が語られながら、刺客としての日本人壮士の姿は、その物語の完結を損ねていたとする。

次の「死者たち」は、厳妃によって悪妃の物語は更新され、陰謀渦巻く韓国宮廷が報じられる一方で、厳妃の子英親王の来日報道から、女性ジェンダー化された朝鮮と別れて大日本帝国の教育によって成長する朝鮮という物語が想定されている。しかし、安重根を勇性ジェンダーで語る報道は、そうした朝鮮の物語を綻ばすことになった。

「天皇と暗殺」は、明治末年の日韓併合、大逆事件、明治天皇の死という歴史を扱って、本書の最も興味深い部分になっている。一九一〇年の朝鮮併合は、報道メディアが欲望してきた物語の完結であった。それと前後した大逆事件報道は、逸脱する女、堕落した性、清潔を脅かすなどの意味に満たされてきた「無政府主義」という記号が、天皇暗殺を欲望させるという点で、「メディアで熟成された事件だった」と指摘される。朝鮮王朝の物語と同様に、悪しき女を陰謀の根源に置く病んだ表象として語られる物語は、裁判中の管野須賀子の血色のよさによって損傷される。と同時に、天皇の病は、その身体を有標化して記述可能とし、肥満という女性ジェンダー化された身体を物語ることで、メディアの殺意の対象となっていたとする。そして、天皇の死は「われわれ」の中心が侵され、大日本帝国として境界を画定してきたさまざまな物語定型が無効化される表象になったという。

こうした時代の物語が読み取られてくるのだが、明治という枠組みが揺るがされることはなかった。どうしても分析者が依拠する歴史は動かし難く存在して、予定調和的に論理に回収されているように読めてしまうのである。その意味で、この論述自体が「われわれ」を作り出していないかという余計な危惧をもってしまった。本書の課題といえば、その辺にあるのではないだろうか。

（横浜市立大学教授）

思想